

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 4 月 17 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K03260

研究課題名(和文)現代米国政治のイデオロギー対立における宗教的要因

研究課題名(英文)Religious aspect of ideological conflict in current American politics

研究代表者

飯山 雅史 (Iiyama, Masashi)

北海道教育大学・函館校・教授

研究者番号：80732023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：米国政治のイデオロギー亀裂深刻化の背景は、宗教保守的な白人福音派が共和党の岩盤支持層へと変貌したことで、宗教争点の亀裂拡大が生まれたことが主要要因の一つである。この研究では福音派が今後も共和党支持を続けるかどうかを推測する手段として、福音派の政治傾向を計量分析した。回帰分析の結果では、様々な社会経済的属性を制御しても、福音派教会のメンバーであることが共和党支持の有意な要因であり、その傾向は2012年の大統領選挙でも強化されたことが明らかになった。また、2016年における福音派若年層の政治傾向は高齢世代と大きな格差はなく、福音派は今後も共和党の岩盤支持層である可能性が高いことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代のような米国の宗教右派運動は衰退したが、福音派が今後も共和党の岩盤支持層であり続ける見通しが強い。このため、宗教的争点は今後も米国政治の機能不全をもたらす要因となっていくであろう。トランプ政権において、白人中間層の共和党支持が注目されているが、彼らと宗教保守層は大きく重なっており、宗教的側面での対立構造に変化は見られていない。このため、共和党は高所得高学歴の富裕層の政党から、低学歴中低所得層の宗教保守的な支持層の政党へと変質を続ける可能性が高い。それは自由貿易や国際主義を掲げてきた同党主流派の衰退を意味し、日本外交にとってもきわめて憂慮すべき展開となるであろう。

研究成果の概要(英文)：One of the major factors behind the growing ideological cracks in US politics is the spread of religious disputes due to the transformation of religious conservative white evangelicals into Republican bedrock supporters. This study quantitatively analyzes evangelical political trends as a means of estimating whether evangelicals will continue to support Republicans. Regression analysis shows that, despite controlling for various socio-economic attributes, membership in evangelical churches is a significant factor in supporting Republicans, a trend that was strengthened in the 2012 presidential election. The politics of young evangelicals in 2016 were not significantly different from those of older generations, indicating that evangelicals are likely to remain Republican bedrock supporters.

研究分野：アメリカ政治

キーワード：アメリカ 宗教右派 福音派 宗教と政治 共和党 民主党

## 1. 研究開始当初の背景

現代アメリカ政治の大きな特徴は、保守とリベラルのイデオロギー的分極化が進み政党対立が過激化した結果、政府が機能停止に追い込まれるほどの政治停滞に陥ったことである。対立は主に、経済・財政政策、外交政策、宗教・文化的政策の三つの争点から生まれていた。

この中で、宗教的争点に関しては1970年代末に誕生し1990年代にピークを迎えた激しい宗教右派運動を通して、米国政治に持ち込まれた新たな争点である。しかしながら、2010年代になると、イラク戦争などが大きな政治的亀裂を生み、かつ小さな政府を極限まで追求する茶会運動などの保守グループが過激な大衆行動を広げた結果、宗教的争点は政治の後景に退き選挙において中心的な争点とはならなくなってきた。

この時点で、その後の大きなシナリオとして考えられるのは、「こののち宗教的争点は政治対立の基軸から消滅し、少なくともこの側面における分極化はテーマから消滅していく」のか、「宗教的対立は後景に退きながらも、米国政治の基本的なイデオロギー対立して残り、分極化をさらに進めていく」のかという二点である。

アメリカ政治の機能不全はアメリカ外交の弱体化に直結し、世界の秩序と安定の維持に大きな問題を投げかけていく。このため、機能不全を生み出す分極化がどのように進行していくのか、合理的な推測を行うためのデータは、国際社会にとっても極めて重要な資料となる。

## 2. 研究の目的

分析の主な対象はプロテスタント白人福音派の政治傾向である。宗教保守主義の強い福音派はかつて強い民主党支持層だったが、1960年代後半から民主党の強いリベラル化に反発して、徐々に共和党支持層に転向し、現在では共和党の中核的な支持層となっている。この政党支持基盤の大規模な変化が共和党の宗教保守化を生み、逆に無宗教者の民主党支持急増などで両党の宗教政策的亀裂が拡大した。

このため、福音派が今後も強い共和党支持基盤であり続けるかどうかは、政治分極化を考える上での大きな視点となると考え、福音派の政治傾向分析をこの研究の目的とした。具体的には、宗教が選挙の中心的な争点でなくなった時、福音派は共和党を支持する理由を失って支持率が低下していくのかどうか、支持率が変化しないのであれば、福音派が共和党支持を継続する理由は何であるかを解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

宗教が有権者の政治的態度に影響を与えているかどうかを測定する場合、「宗教的信条」「宗教への帰属」「宗教への態度」の三つの側面を考慮する必要がある。宗教保守的な信条を持つ人は保守的な政党への支持が強いと想像されるが、きわめて宗教保守的な教会に属している有権者は自らの信条がそれほど保守的でなくても、教会コミュニティの雰囲気などから保守的な政党支持に傾くかもしれない。しかし、保守的な教会コミュニティに属していても教会に参加しないなど宗教への態度が冷淡であれば、そのような影響はあまり受けないであろう。

以上から、信条、帰属、態度の三つの変数が独立して有権者の政治行動に影響を与えるとの仮説にたち、分析を行う。このうち信条だけが政治行動に影響を与えているのであれば、宗教が政治争点でなくなったときには、宗教保守的な福音派が共和党支持を継続する誘因は減少するが、帰属が強い影響を与えていれば、福音派コミュニティそのものが共和党支持の政治文化を抱いていることになり、宗教が争点でなくても共和党支持が継続するであろう。

分析は計量的な手法を使い、データセットは学術的信頼性の高い全米選挙調査 (American National Election Studies=ANES) を使用した。個別変数の変化とともに、多変量を投入した回帰分析によって、因果関係の分析に踏み込んだ。最終年には2016年大統領選挙結果を包含した最新のANES統合ファイルが使用できるようになり、同年から選挙に参加するようになった若年層の分析も可能となった。

## 4. 研究成果

(1) 福音派は宗教が争点でなくても共和党の支持基盤である可能性が高い

上記の研究方法に基づき、ANESのデータセットを用い、米国18歳以上の成人有権者全体に対して、宗教が政治に影響を及ぼす三つの側面を投入した回帰分析を行った。従属変数は政党帰属意識(強い民主党支持=1~強い共和党支持=7)であり、制御変数として一般的な社会経済的属性(世帯所得、教育レベル、政治的南部出身、組合加入など)はすべて投入した。

その結果が下記の表1である。この表では1964年から2012年までの投入した変数の係数を示したものである。ここで福音派の係数を見ると2012年は有意で0.89とかなり高い値を示している。これが意味することは、ほかの属性がすべて同じ有権者(つまり、同じ世帯所得で同じ教育レベルを持ち、同じレベルで宗教保守的で教会にも同じ頻度で通っている人)であっても、福音派教会に属している人は、属していない人よりも共和党支持率が高いということである。係数は標準化されているので他の変数と比較可能であり、ほかの要因と比べて福音派への帰属はかなり高い係数となっている。

これが意味することは、福音派教会というコミュニティそのものが共和党支持を高める要因になっているということに他ならない。福音派教会に属する人の多くが共和党支持者で、教会での会話もそのような内容が多く、逆に民主党支持者であると孤立感を味わうような環境が生

まれていることが、その理由として推測される。

そのような環境(コミュニティ独特の政治文化)は短期間に生まれるものではない。表1を見ると福音派は1960年代において強い民主党支持だったが、40数年かけて強い共和党支持者に変化していった。その変化の過程で福音派の係数が有意でなくなった時期もあるが、次第に共和党支持が強まった結果、2012年に再び有意な係数として登場したのである。ちなみに、2016年の回帰分析結果は未発表だが、同様の分析で福音派係数は0.135の有意となり、上記分析の有効性を裏打ちしている。

したがって福音派には、すでに強い共和党支持バイアスがコミュニティの政治文化として根付いているといえるだろう。これは、宗教的争点が政治対立の前面に現れなくなったとしても、根強く共和党支持基盤であるという現状を説明する。さらに、その政治文化が変化するには長い期間(民主党から共和党への変化には数十年かかった)がかかると思われるため、宗教倫理的には福音派の支持を得られそうにないトランプ大統領が、福音派から強い支持率を獲得していることの説明ともなる。

(2) 近年の福音派若年層の共和党支持傾向は、高齢世代と大きな格差がなく、世代交代によって福音派が変容する可能性も少ない

上記のように、ある有権者グループの政治傾向が短期間には変化しない理由は、米国において政党への愛着心(政党帰属意識)は非常に堅固であり、若年期にある政党への支持が定まると、ほぼ一生の間、それが変化しない傾向が見て取れるからである。

そうであれば、福音派の政治傾向が長期間であっても大きく変化した理由は何か。それは世代交代が大きな説明となる。高齢世代の政党帰属意識が生涯変わらなくても、若い世代が大きく異なった政党帰属意識を持っていれば、世代交代が進むにつれて徐々に福音派の政党支持傾向は変化していくのである。筆者は以前の研究で、1960年代からの民主党から共和党への支持傾向変化を分析し、変化の大きな要因が世代交代であることを示した。

このため、今後の福音派の動向を推測するために、福音派若年層の政治傾向は重要なデータとなる。図1は福音派有権者の世代別政党支持率の推移である。これを見ると、1978-1989年に生まれたいわゆるミレニアル世代では、一時期、前世代よりもリベラルで民主党支持率が高い時期があったが、2012年以降は他の世代とあまり大きな格差がみられない。また、ミレニアル世代よりも若い1990年以降に生まれた世代では、高齢世代とほぼ同じがより保守的で強い共和党支持傾向も見られた。

1960年代から福音派の政党支持傾向が変化していった時代では、高齢世代と若い世代の間では大きな政党支持傾向の格差があったが(図1で見られるように、1930年代ごろまでに生まれた世代は、生涯、強い民主党支持傾向が続いた)、現在の福音派では世代間に大きな政党支持格差は存在しない。1978~1989年に生まれた世代はすでに中年にさしかかり、政党帰属意識が安定化する時期である。1990年以降に生まれた世代のイデオロギーと政党支持傾向は、まだ動揺する可能性があるが、少なくとも現時点で世代間格差による福音派の変容を予測することは困難であろう。

一方で、近年の傾向として無宗教者が急増し、特に若者の間で顕著であることが指摘されている。しかし、無宗教となった人の多くは主流派教会から離脱した人であることも明らかになり、無宗教者の増大が、福音派の政治への影響力を減少させる可能性は高くない。

以上、(1)と(2)の分析結果から、トランプ政権の誕生を通して米国の政治状況は大きな変化があったにも関わらず、福音派は今後も継続して共和党の強固な支持基盤であり続ける可能性が高いことを示した。これが意味するのは、共和党は今後も強く宗教的な政党であり続け、宗教的な問題をめぐる米国の政治的分極化に変化の兆しは見えていないということである。

#### 引用文献

飯山雅史. (2013). *アメリカ福音派の変容と政治：1960年代からの政党再編成*. 名古屋大学出版会.

Campbell, A., Converse, P. E., Miller, W. E., & Stokes, D. E. (1960). *The American Voter*. John Wiley & Sons.

表 1 宗教の三つの B を投入し、政党帰属意識を従属変数とした多変量回帰分析

	1964	1968	1980	1984	1986	1988	1990	1992	1994	1996	1998	2000	2004	2008	2012
年齢	.076**	.047	-.041	-.042	-.088**	-.046	-.086**	-.074**	-.074**	-.069**	-.101**	-.090**	-.033	-.036	-.006
性別 <sup>b</sup>	-.009	-.019	-.035	-.028	-.036	-.066**	-.028	-.063**	-.099**	-.122**	-.025	-.063*	-.103**	-.083**	-.076**
政治的南部	-.214**	-.176**	-.090**	-.098**	-.087**	-.108**	-.063*	-.049*	-.043	-.040	.021	.048	.039	.090**	.017
世帯所得	.090**	.012	.124**	.159**	.097**	.080**	.117**	.136**	.181**	.119**	.072*	.086**	.133**	.195**	.089**
組合加入 <sup>c</sup>	.206**	.075**	.131**	.156**	.122**	.145**	.137**	.147**	.162**	.128**	.091**	.128**	.113**	.066**	.054**
教育	.105**	.196**	.040	.003	.011	.057*	.045	.062*	.054	.059*	.080*	.072*	-.007	.005	.005
聖書認識	-.053	-.020	-.030	.026	.037	.006	.038	.075**	.055*	.075**	.044	.019	.086*	.084**	.095**
教会出席	.057	.027	.131**	.030	.007	.050	.030	.110**	.083**	.116**	.102**	.105**	.073*	.130**	.132**
福音派	-.102**	-.059*	-.100**	-.024	-.050	-.064*	.008	-.047	-.025	-.042	.048	.055	.058	.011	.077**
黒人	-.163**	-.275**	-.284**	-.225**	-.312**	-.280**	-.266**	-.285**	-.296**	-.267**	-.298**	-.245**	-.362**	-.313**	-.374**
カトリック	-.232**	-.232**	-.185**	-.153**	-.155**	-.113**	-.138**	-.182**	-.176**	-.142**	-.042	-.033	-.096*	-.037	-.059**
ゴダヤ	-.123**	-.153**	-.163**	-.102**	-.048*	-.089**	-.084**	-.133**	-.127**	-.092**	-.092**	-.101**	-.099**	-.087**	-.073**
無宗教	-.029	-.051	-.035	-.067*	-.100**	-.118**	-.063*	-.078**	-.131**	-.090**	-.045	-.043	-.077	-.063*	-.095**
その他宗教	-.021	-.046	-.061*	-.120**	-.112**	-.131**	-.108**	-.132**	-.190**	-.181**	-.159**	-.085**	-.124**	-.156**	-.154**

注 American National Election Studies 統合ファイルから筆者作成。従属変数は、政党帰属意識で強い共和党支持から無党派を経て強い民主党支持まで 7 段階。標準化係数ベータを記入。a. 宗教伝統系列タミーは主流派を基準とした。b. 性別は 1=男性、2=女性、c. 組合加入は世帯の中で労働組合に加入している人があるかどうか。1=加入、2=非加入、\*\*：p<=.01、\*：p<=.05 で有意。N は年によって異なるが 981 から 5031。調整済み R 二乗は .122-.197

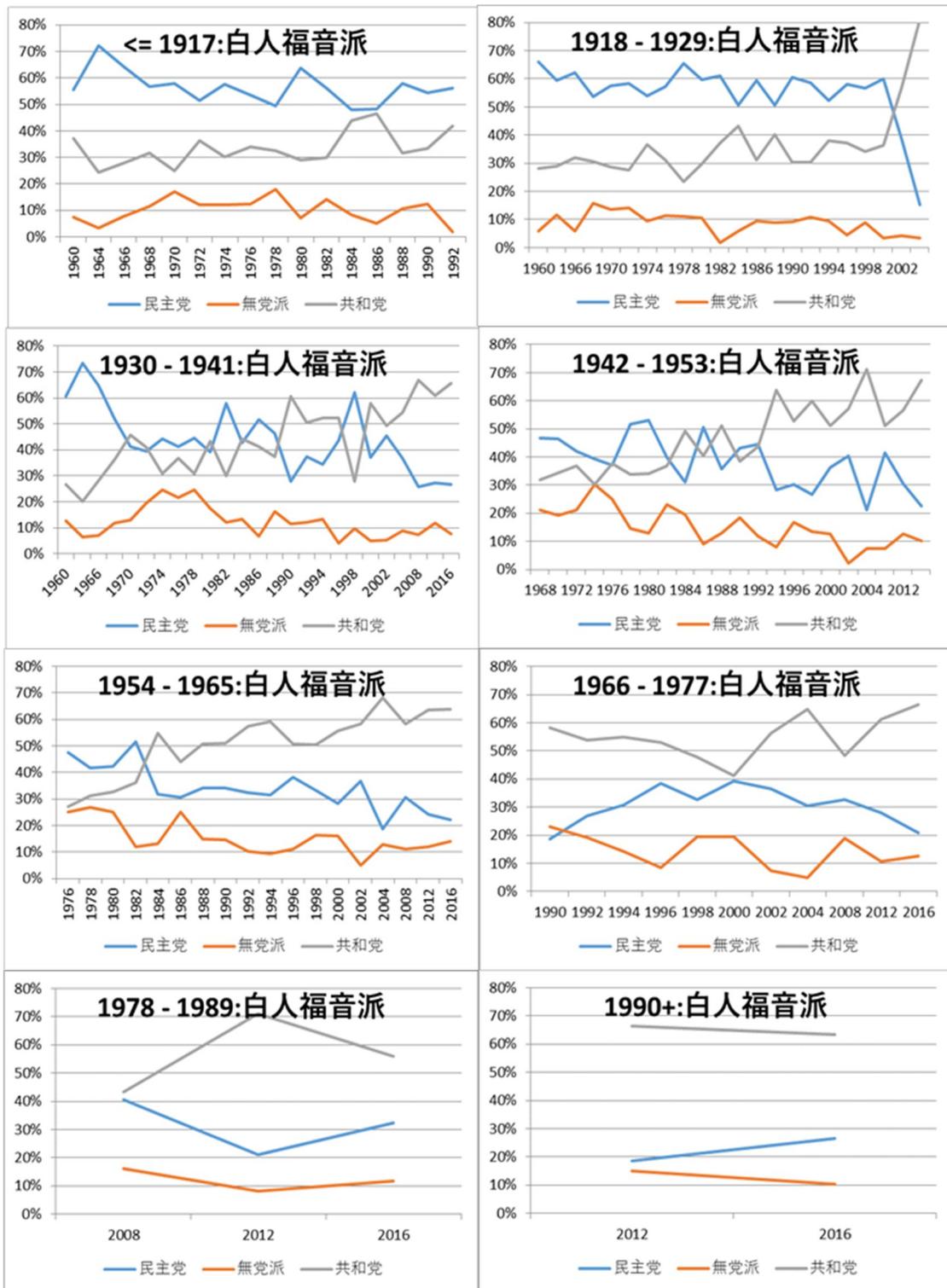


図 1 福音派の世代別の政党支持率推移

注 ANES Cumulative file から筆者作成。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 飯山雅史	4. 巻 86
2. 論文標題 2016年米大統領選挙と政党再編成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 23-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山雅史	4. 巻 85
2. 論文標題 アメリカの政党支持に与える宗教の影響	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山雅史	4. 巻 84
2. 論文標題 2014年米中間選挙とオバマ外交	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯山雅史	4. 巻 89
2. 論文標題 米国における白人福音派若年層の政治傾向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文論究	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----